

四知

琴森 戀

謂れない事で 誤解され 嗚咽が止まらず
一睡も出来ず ひたすら憤るしかない時に
私には魔法の言葉があるのです

それは「四知¹」と言います

天知る 地知る 我知る 子知る

あなたは誰も知らないと言うけれど
そんなことはないでしょう

天が知っている

地も知っている

わたくしも知っている

あなたも知っている

何事も この四者が知らないと言う事はないのです

己は変えられるけれど

他者は変えられないから

分断が全ての争いを招く前に

魔法の言葉で心を鎮めるのです

天知る 地知る 我知る 子知る と

1 *四知・「後漢書」楊震伝から・悪事や不正は暴かれるの意

海鳴り

琴森 戀

一九四四年八月二十一日 対馬丸は希望を抱き出航した

……窓のない船倉は蒸し暑く子供らは甲板に出ていた……

月影の下で 子供らは楽しい未来を夢見ていた

長崎に着いたら 美味しいご飯を食べて

新しいお友達と皆で楽しく おはじきやカルタ遊びをしましょう と

けれど航行中 魚雷が船底に激突し 瞬く間に船体は傾くと 徐々に船は沈んだ

……船倉に取り残された人々や 海に飛び込んだ人々も 昏い海の底へ……

筏の紐が解け 漂流した人も 一人 又一人と海に投げ出された

……人喰い鯨の泳ぐ海は容赦なく人間を呑み込んだ……

そんな阿鼻叫喚の中で 通信長や有志の人々が

身を呈して裸になり 舢にロープを巻き付け 漂流した人々を数十名も助けたが

天候状況が悪く 皆を救う事は出来なかった

対馬丸の次の船に乗り 疎開出来た人 漂流しながら 奄美大島に流れ着いた人

……漂流の果て 葬ることも叶わず悪石島の石を渡された人もいた……

立春 満開の寒緋桜に鶯が啼いている

独り古径を歩き 記念館裏の「海鳴りの像」²の前で佇む

……乱落した枯葉手樹の枯葉は筏の如く

木の実ほ ぼろぼろ 大地に落涙し

二つの幹瘤は 赤子を亡くした母の乳房に似て張れている……

風音と葉ずれが共振するかの如く

嗚呼！ 運命が泣き叫んでいる！

今歳も何処かで 海鳴りが聴こえる

明後日に向いた椅子

琴森 戀

級友の彼女は 醒めた眼差しで 早熟していた
美人で利発で 成績も良かったから 級友から嫉妬され
苛められ 無視され 椅子は 教室の端にどけられていた
明後日に向いた椅子を 表情一つ変えず 黙々と戻し続けた
私は彼女と 図書室でよく会い話すようになった
「皿に生首の乗った女」の文庫を読み 彼女と親密になったことで
何時しか私も 苛めの標的にされた

萌黄色の香りが充滿する夏 浜辺に腰掛け
二艘の草舟を 海に流した

草舟は 岩礁に激しくぶつかりながら
散り散りに別れ 波光煌めく波間に消えた
そして海面に銀色の尾ビレが 突如跳ね 波紋が広がった と突然
「死んで見ようと戯談に考えただけでも、身近に明るいところに出られる。
この世は死ねない約束づくめだ⁴」と 彼女が ぼそり 呟いた

やがて 不登校になった彼女は彼方此方の心療内科を梯子していた様で
数ヶ月後 服薬自殺を図った

彼女は明後日に向いた椅子を諦め 明明後日をも諦めた

彼女を 卑怯者だと罵りたくないが 釈然としない
ただ 今でも光栄に輝いているのだけは 否めない
十六歳だった彼女は 永遠に刻が止まった美しい少女の儘なのだから

3 「皿に生首の乗った女」・オスカー・ワイルド著『サロメ』

4 「死んでみようと……」・室生犀星『鐵集』より引用